

書籍紹介



『獣医学・応用動物科学系学生のための野生動物学』

村田浩一, 坪田敏男 編

2013年2月, 文永堂出版 発行

B5判, 348頁

定価 (本体 8,000円+税)

秋葉悠希・浅川満彦 (酪農学園大学)

昨年の本ニュースレターでも紹介したように、全国の獣医大は「コアカリ」や「共用試験」などで揺れている(詳細は、浅川, 2012)。「野生動物(医)学」もその対象科目に指定されたので、コアカリ準拠の教科書出現が待望されていた。この本は、2013年3月現在、コアカリ項目を完全に網羅した(後述、本書章構成参照)唯一無二のテキストであるため、新年度からの教科書としての使用が可能となり、少なくとも次の獣医大(北海道大学、日本獣生命科学大学、酪農学園大学)で採用されたという。他の大学でも採用されるであろうが、いずれにせよ、この春休みは、当該科目担当教員にとって、教材研究として十分に読み込み、授業準備に勤しんでいるはずだ。

なお、浅川も本書執筆者の1人だが(「疾病と病理」の寄生虫の項目)、すべてが出揃ったものを読むのは、今回、初めてであったので、一般読者と同じ視点で勉強している。

本拙文は、当初、野生動物医学の授業担当者である浅川が、教科書として使用する立場から内容を吟味するはずであった。しかし、ユーザーの意見の方が重要なのではないかと考え、浅川が指導する獣医学部4年生(ちなみに、本学の野生動物学受講者は「野生動物医学概論」という科目を選択した2年生)に読み込んでもらい、分析結果をレポートしてもらったが、これが思いのほか、良いできた。前段で、まず、その原文を紹介する。

(文責 浅川)

“保全医学”や“One Health”といった学問・考え方が展開されつつある現代の社会において、獣医学や応用動物科学のカリキュラムにおける野生動物の医学、とくに生物学分野が重要視されてきている。しかし、これまで出版されてきた関連書物では、遺伝子レベルから生態系レベルまでといった多面的な観点からとらえたものが欠落していた。私(秋葉)自身も、獣医学を学ぶ学生として野生動物学に強い関心を抱き学んできたが、生態学や医学

に特化した本はあるものの、野生動物に関わるための知識を体系的にまとめた本がないことに物足りなさを感じていた。本書は、獣医師あるいは野生動物研究者・保護管理者として、最低限、身につけておくべき、野生動物に関する知識を示している。つまり、本書は、野生動物の生態機構を理解したうえで、生態系バランスや生物多様性を保全し、健康で健全な環境を維持するための理論・技術を多面的な視点からとらえ学ぶための教科書であるといえる。文中には、あらゆる専門書や論文などの参考文献の紹介があり、さらには、写真や論文・コラムが入ったCDも付録としてついてくるため、興味を持った分野についてさらに深く探求することが可能であると感じた。本書の章構成(標題)は以下のようになっていた(多くは「野生動物」がついていたが、これらは省略);序, 生物多様性, 系統進化と分類, 形態, 生理と行動, 生態と生息環境, 捕獲と不動化, 疾病と病理, 環境汚染, リハビリテーション, 動物園・水族館学, 絶滅危惧種の保全, 管理, 外来生物, 法制度と政策論。

序章では、野生動物学と野生動物, 保護と保全といった言葉の定義が述べられ、野生動物に関わるスタート地点をしっかりと示しているように感じられた。全体的に、各章、丁寧な説明を加えているにもかかわらず、基礎から応用まで、マクロからミクロまで、歴史から将来の展望までといったように、本書の理念でもある“多面的な視点からとらえる”ということを実現し、充実した内容になっている。新しい見解も記されており、とても興味深い。また、どの章においても、文の中で言葉の定義や説明がなされているため、あらゆる読者が内容を正しく理解できるものになっていると思われる。

本書の特徴として、各分野を各専門家が執筆しているという点がある。そのため、深く充実した内容の実現や参考文献の紹介、最新の見解が述べられているという長所がある。しかし、一方で、様々な執筆者が各分野を担当しているため、文面の違いが顕著であり、各分野のつながりを読み解くのがやや難儀である点や、第1章と第5章や第3章~第4章にかけてなど、一部、内容に重複がみられるという短所が存在するのも事実である。統一感のある文で各分野のつながりを明確にした1冊にすること、重複した内容を省き、さらなる内容の充実をめざすなどの改善は、今後の改定版に期待したいと思う。また、誤字・脱字だと思われるものが多々あった(以下にまとめて示す)。教科書として使用するために、内容だけでなく、こういった部分も改善していただきたいと感じた:P68 右 L2「押し出され血液は」→「押し出された血液は」、P70 右 L5「喉頭は哺乳類のように」→「喉頭は哺乳類のように」、

P72 左 L1「下顎骨と上顎骨」→「下顎骨と上顎骨」, P74 左 L13「食道の内空」→「食道の内腔」, P74 右 L16 「分泌する細胞が」→「分泌する細胞で」, P74 右 (2) タイトル「胃前動物」→「前胃動物」, P75 左 L9 「噴部」→「噴門部」, P156 左 L4 「救護活動が (第10章)」→「救護活動が (第9章)」。

本書の全体的な紹介はここまでにして、以下、野生動物の救護活動というものに焦点を当て、主に第9章「野生動物のリハビリテーション」を中心に読み解いてみたいと思う。野生動物に関わりたいたいと考える大半の人は、野生動物の救護や保全といった活動に強い興味を抱くのではないだろうか。私(秋葉)も例外ではなく、野生動物の救護活動というものに以前から興味を持っていた。しかし、大学での様々な講義やシンポジウムへの参加を通して、疑問やジレンマも同時に抱えてきた。今回、本書を通して、救護活動について見つめ直すことができた。本書では、傷病野生動物の救護とは、「主に人為的な原因で発生したけがや病気の動物に治療や一時的な飼育を行い、適切な生息地に野生復帰させる活動である」と定義されている。9章では、事例も含めた具体的な救護措置、注意点、不動物のための処置、対象動物種、救護原因といった、救護活動の指針となるような内容が具体的に述べられている。一方で、救護の抱える欠点や疑問、問題点にもしっかりと触れている。野生動物たるもの、人の手に触れた時点で「死」に等しい危機であること、救命・放野(リリース)した個体が生態系に与える影響、放野できない場合の個体への対応、QOLや生態系への影響・希少種であることを考慮した安楽殺の是非といったような、救護活動のジレンマについて、筆者の二人は、経験を生かした自分なりの見解を述べている。個体と生態系の調査をしっかりと行うこと、トリアージと安楽殺の基準を明確に設けることが救護活動の抱える問題点についての対処法として有効だという考えが、筆者の2人に共通しているように感じられた。最後に、主観的な内容となってしまうが、私(秋葉)は、「1頭1羽の個体の命を地球の健康にささげる努力」「この活動は個体の命のバトンリレーに留まらず、発見者、搬送者、通報者の想いも繋ぐものである。それゆえ、それぞれの立場で関わった人間の意志も大切にされるべきであり、アンカーの獣医師だけに命の取扱いに関する全ての判断が委ねられるものではない。結果的に救命に至らなかつたとしても、携わった人間に自然保護や野生動物への関心を芽生えさせ、さらにはそれが事故の予防などの社会的な動きにも繋がっていく可能性がある。」という、筆者2人の言葉に、救護活動の意味を見いだせたように思う。

以上、長々となってしまったが、冒頭にも述べたように、本書

は野生動物に関わるのに必要だと思われる知識を1冊にまとめた本となっている。本書を通して、野生動物との関わりを多面的な視点で捉えることが可能になるだろう。言葉の説明や写真、参考文献の情報も豊富であり、野生動物学を専攻する学生、野生動物に興味のある方には、一読いただきたいと思う。とくに、これから野生動物学に携わっていかうと考える方に、絶好の入門書・教科書として、ぜひ、お勧めしたい1冊である。(文責 秋葉)

まず、授業には時間的制限がある。たとえば、冒頭述べた本学の野生動物医学概論では、1コマ60分、15コマ1単位が充当される。本書は序章を含めた15の章立てとなっているので、各章を各コマで扱うとするなら、教科書としてのコマ割要件はクリアされている。しかし、各章内容は、多寡はあるとしても、60分ですべて扱うのは不可能である。ただし、仮に基礎、病態、臨床および応用の順で展開される獣医学正規課程を一通り終わった学生(最低でも4年生後半)であれば、重要項目を中心に、本書準拠の授業は可能であると思う。しかし、本学のように専門教育が始まったばかりの2年生に講ずるのは、やや無理がある(まして、選択科目である。そのような状態で、共用試験になだれ込むのは、土台、無茶な話なのだが…)。したがって、受講者には、専門課程が終了したあと、本書を、再度、じっくり読み込むことを指導しておくことが推奨される。もちろん、詳細な内容は、2年生の段階では理解はできなくとも、各学問分野の面白みは、本書で、充分伝わるはずだ。

たとえば、2年生のような初学者が、もっとも注目することの1つが、野生動物学の醍醐味と言える「捕獲」であろうが、岸本真弓氏(専門医でもある)による5W1Hに沿った美しい記述は、きっと、彼らも刺激を受けるはずだ。とりわけ、Whyは野生動物を扱うどのような分野でも肝であることを感じ取って欲しい。産業動物や伴侶動物の形態機能や疾病について教育研究する意義は自明。されど、野生動物はそうはいかない。学術集会などの研究発表で、得意げにポスター内容を話していた学生が、「で、何でシカの寄生虫なんて調べているの?」と市民に質問され、立ち往生しているのを見る。その時、野生動物の研究をすることは、並行して啓発活動を活発に行い、説明責任を果たすことにも費やさないといけないと知る。本書各章では、それぞれの専門家が、その研究の必要性(理由)を熱く語っているので、非常に参考になる。後年展開する自身の卒業論文研究の時の参考にしよう(単に、コピペしてはいけない)。

個別分野の意義は、このように初学者にも、比較的分かりやす

いであろうが、野生動物学全体の存在理由は、大変、難しい。獣医大教員ですら、きちんと理解しているとは思えない。単に、「野生動物が好きだから」では体系化された学問分野は立ち上がらない。序章で、野生動物（医）学が One Health を具現化する応用獣医学（実学）であることが明確に説明されていた（ことに図3は素晴らしい）。さすが、村田浩一氏（本書編者、日本野生動物医学会会長で、ズーラシア園長）である。

なお、大学の授業では further reading（より深く学ぶための参考書）の提示が必要なので、各章文献表の厳選された（編集上、数が絞られたので、結果的に）成書紹介は、授業担当者にとって大変助かるはずだ。いや、そうではなくて、学生諸君は、それを参考に研鑽を積んでほしい。さらに、日本野生動物医学会認定専門医（以下、認定医）試験を受験される方は、一次試験で課せられる内容が本書の内容準拠（付録の CD 含む；本書出版元で発行している獣医学専門商業誌 JVM で特集された野生動物医学関連の総説論文集）となるようだ。本書が刊行される直前、絶滅危惧種の保全の章を担当された大沼 学氏（専門医委員会のリーダー）

がそのように言ってきて、「専門医諸兄はこの本に準じた問題を作れ」と命じてきた（人使いが荒い。大沼氏は浅川のゼミ生であったが、立場は逆転し、いまや彼の下働きをしている）。

獣医学関係者にとっては、浅川含め、とても差し迫った状況での読み込み作業となったが、非獣医系（応用動物学、獣医看護学、林学、水産学、生態学、医学など）の学生さんにとっては、最低限の基盤情報の書であるので、まず、気軽に手に取って、楽しんで欲しい（獣医学書の宿命なので、やや高価かもしれないが）。もちろん、社会人の方も、野生動物（動物園水族館展示動物、特用家畜、愛玩鳥、エキゾチック・ペット、特殊な実験動物なども含む）に関わる方々には、唯一無二の有益な資料となるはずなので、ご用意頂きたい。

（文責 浅川）

文 献

浅川満彦. 2012. 書籍紹介『日本の外来哺乳類—管理戦略と生態系保全』（東京大学出版会）. 野生動物医学会ニュースレター (34): 21.